

# 議員が見たもの・感じたこと

## 「ジビエソーシャルプロジェクト」MOMI-J株式会社視察 (岩手県大槌町)

10月28日(火)

野生動物による獣害が深刻な問題となっている。政府は二ホンシカやイノシシの個体数を令和23年度までに半減させる目標を掲げ捕獲を進めてきたが、十分な成果は上がっていない。そうした中、私たちは岩手県大槌町の「ジビエソーシャルプロジェクト」に取り組みMOMI-J株式会社を視察した。山には多くの野生動物が生息し、近年は特に二ホンシカによる農作物被害が増加している。人の手による管理が求められる中、同社は2017年から「ジビエ」に関わる社会的課題を持続的な仕組みで解決するため、個人、企業、行政など多様な主体が連携し、「書獣」を「まちの財産」に変える「大槌ジビエサイクル」を生み出した。そこには、ハンターに受け継が

れてきた「命への感謝」の精神が根底にある。狩猟されたシカは食肉加工業者へ、革や角はクラフト作家へと受け渡され、商品や作品として大槌町の物語とともに通販サイトで全国へ発信されている。さらに、現場体験を通じて魅力を伝える活動や、次世代のハンター育成にも力を入れている。こうした循環によって、持続可能なジビエ事業を構築している。MOMI-J株式会社には、命の恵みを広く伝え、大槌町の鹿肉としての認知を高め、復興ビジネスを長期的に継続していくことを期待する。

(今 勝吉)



## 岩手県水産技術センター視察 (釜石市)

10月28日(火)

釜石市の岩手県水産技術センターで漁業の現状と現在取り組んでいるヨーロッパヒラガキの養殖について説明を受けた。本県同様の全国有数の水産県である。しかし近年は秋サケ、サンマ、スルメイカは年々減少傾向にあり秋サケにいたっては昨年度の予報で震災前平均1%未満と深刻な状況となった。沖合トロール調査では暖水性魚種に変化しており沿岸・沖合ともに海面水温は上昇傾向となっている。また急潮による定置網被害が発生しており観測や予測により急潮情報を発行している。センターではホタテガイ養殖の代替の必要性から第一段としてアサリの取り組みがなされたが市場価格など生産者の魅力に乏しかった。現在は第二段としてヨーロッパヒラガキの養殖に大きな



願いを持つて取り組んでいる。73年前に欧州から移入されて養殖試験がなされたがその後途絶えた。しかし近年七つの港で生存が確認された。ヨーロッパヒラガキは高級食材として現在の市場や海洋環境に適合する可能性が高いと期待されている。今年から本格的な養殖試験に着手。担当者の情熱を感じた。自然現象に左右される漁業の深刻な状況は本県、本町も共有しており切に思うは大漁祈願である。

(七戸 仁)

## 「震災語り部ガイドツアー」視察 (岩手県大槌町)

10月29日(水)

深浦町議会では東日本大震災の被災地である大槌町を訪れ、復興状況を視察した。平成26年にも被災地を訪ねており、当時はまだ瓦礫が残り、町民は仮設住宅での生活を余儀なくされていた。今回は11年ぶりの訪問となった。旧役場の隣には「大槌交流センター」が新設され、町民の交流や図書館、避難場所として活用されている。ここで語り部ガイドの案内を受け、現地を視察した。ガイドは2012年に大槌町へ移住したNGO職員で、「おらが大槌夢広場」の代表を務めている。復興は地盤を約4メートルかさ上げし、住宅地と商店街を分けて整備するなど、住民主体のボトムアップ型が進められていた。防潮堤は当初の6.4メートルから14.5メートルに高上げされた。人口は

震災前の約1万6千人から減少し、現在は1万人を下回っている。令和7年8月には1,286名の犠牲者を追悼する屋外施設「鎮魂の森」が完成。毎年3月11日に追悼式が行われるという。最後に訪れた吉里吉里地区の蓬莱島では赤灯台が復元され、美しい島影を取り戻していた。復興の歩みを実感し、安心して帰路についた。

(工藤博利)



▲蓬萊島と赤灯台



▲高上げされた防潮堤